老舗の街・尾張町シリーズ9

# 尾張町商人を支えた女たち

もう一つの商家の風情

# 目　次

はじめに …… 1
嫁いだ頃 …… 2
商売の心得 …… 3
初売り風情 …… 5
商家の食事 …… 6
ねえやのこと …… 7
仕事を手伝って …… 8
信仰と商売 …… 10
あとがき …… 12

さし絵　　村上隆氏（尾張町：村上洋品店社長）

## はじめに

歴史は人と社会の織り成すものとか。商いを生業とする私達は、いつの時代にあっても変わることなく〝人と社会〟の潤滑油のようにして、代々歴史に関わりを持って参りました。

大漢和辞典で「商」の語源を調べると。古く中国の紀元前に遡のぼること、殷の時代にまで至ります。

「朝代の名：成湯が夏に代って天下を有し、亳に都して国を〝商〟と号した。今の河南省商丘県の西南。後、仲丁は囂、河亶甲は相に、祖乙は耿に遷り、……盤庚がまた遷って亳に都し、国号を殷と改めたので、兼ねて殷商といふ。」とあり、

日ごろ気の付かなかった由来に思いを馳せられます。ここで、「商」の解字を見ると「言の省略形と内との合字。内に在るものを外からはかり知るの意。……殷の都の名。殷滅亡後、遺民が行商に従事し、〝あきなひ〟の意となる」とされています。

遠く、〝商い〟の語源は中国の古王朝にまで届く壮大さを持っている訳ですが、人と人の交流によって成り立っていることは動かし難いことです。立派な学識ではなく、人々の生活を少しでも便利にしようとした商人たちが居てこそ、歴史は円滑に作られて来たのではないでしょうか。

これまで、小冊子《老舗の街・尾張町シリーズ》に於いて、素朴な気持で尾張町という土地の歴史や尾張町商人の由来等について調べ、前田利家出身の尾張名古屋の荒子にまで足を伸ばして来ました。今回は、この歴史の円滑な〝かすがい役〟としての商人を、さらに陰になり日向になり支えて来た、女の人達の話を中心に聞いてみたいと思います。

## 嫁いだ頃

あれはここへ嫁いで来た(大正7年＝1918)日の夜やったやろうか、きちんとあん人の前でネマラされて<座らされて>言われたもんやわいね。

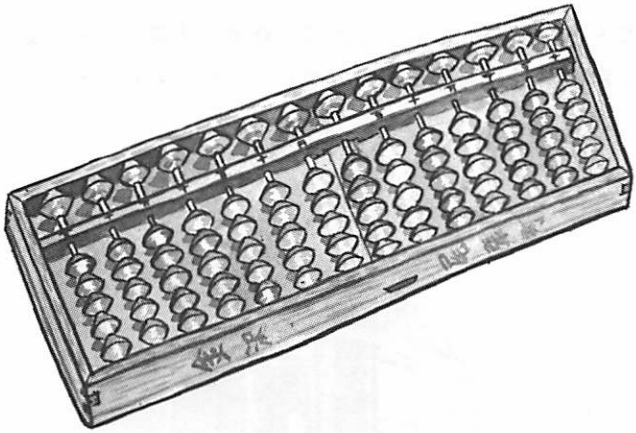
「ここは商売屋やサカイ<だから>、普通の勤め人の家のような訳にはいかん。決まった時間に亭主を送り出して、帰って来るまで好きなことをしているような考えを持っとるんなら、今の内に実家に戻ってもらった方がなんぼか良い。又、家はそんな悠長な人間を置いておく程お人好しでない。そこんとこをしっかと肝に据えてもらわにゃ困る。」

と、今から思えば実家が多少の商売をしていたものの、世間知らずやった小娘のわたしにゃ、ヤクチャモナイ<とんでもない>ことでもただ黙って頷くしかなかったもんやわいね。当時は、見合いといっても親同志が話を決めてしまい、当人同志はやっと婚礼の晩にお互いの顔を初めて見るといったアンバイ<具合>やったさかい、ただもうこんな人がこれから私の亭主になる人かいなと思うほうが先やったわいね。そして、顔を見たとたんにこんな話をされ、もうびっくりするやら驚くやら。ほんまに、テンポな<がんこな>思いやったわ。

そやけど、あん人の働きぶりを見とったら、負けてたまるかという気がしたがや。女やさかいというて、メトにされて<馬鹿にされて>たまるかいねの気持やったわいね。あの頃のお姑めさんは、どこの家でも嫁さんにとっては厳しゅうて、本当に怖いもんやったし。なおさら、自分に鞭打って店の仕事に精出したもんやわいね。

何しろ、朝まだ暗い4時になると、隣の部屋に寝ていたお姑めさんに負けまいと起き出して、家の中から店先まで掃除するんやさかい大変やったわ。そして、洗濯・炊事と続き、6人も居た住込みの店員が起きる前に仕事の下準備も済ませてしもうがや。ご飯はやっとそれから。でも、お姑めさんにおかわりを許されないもんで、ひもじゅうてひもじゅうて、仕方がなかったわいね。それで、タンスの中にこっそりとタクワンを隠して於いて食べとったことが、今では懐かしい思いでや。

お姑めさんにすれば、商売屋のおかみさんとして早く一人前になって欲しいから、若い内から楽させたり贅沢させたらいかんと思うたんやろな。でも、今の嫁さんや、孫の嫁さんには、同じことをして苦労させとうないわねえ。



商売の心得

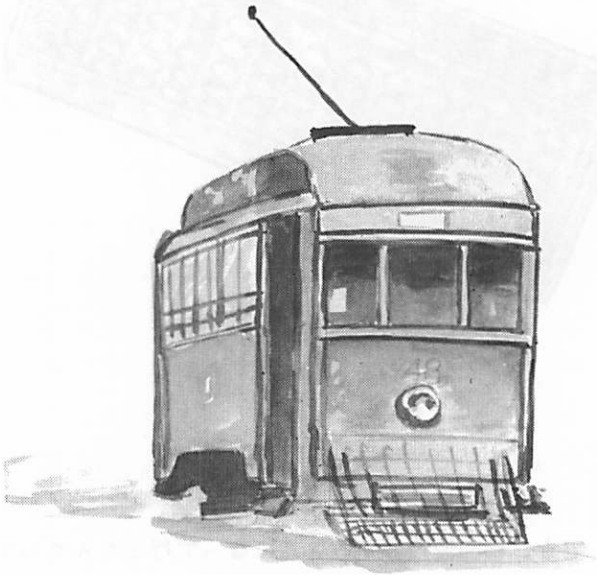
何やかや言っても、商売屋のおかみさんになって行ったんやねえ。今までの里のことはさて置いて、まずお店をどうして繁盛させるかが、四六時中頭ん中を埋めとったわいね。難しい理屈なんか関係ない、兎に角、体を動かしていれば何か前へ進むような気がして、しゃにむに働いたさかい。あれが良かったんやね。

里へ帰ったことなんて数える程やったけど、久し振りにだいふくもちをお腹一杯食べてしもうて、後からお腹が痛くなってしもうたんには往生したわいね。

お姑めさんに話せば、何こさ言われるか分からんかったし。

そんなんで、盆も正月もすぐに過ぎてしもうたわいね。やっぱり、私が骨を埋めるのはこの尾張町のお店しかないがや。私ゃ、ここで頑張らないかんちゅうて、本当に何度肝に命じたことやら。

イサる<自慢する>訳やないけど、ここ尾張町は何ちゅうても金沢で一番の商店街やったしね。例え小そうても、この場所で店を張っていられるちゅうことは、あの頃では大変なことやったがさかい。この街の勢いに太刀打ち出来る街は他に見当たらんかったもんや。金沢電気鉄道の市電が最初に通ったのも、尾張町からで、私の結婚した翌年(1919)やから、忘れもせんわ。



里の親にしても、娘が尾張町へ嫁いでいる……と言うことが、どんなにイサれる<自慢出来る>ことだったか、ソリゃ<それは>大変なもんやったろね。

長生殿の森八やら、ハイカラもんの三田商店、薬の福久屋、山勝のトッケイ屋、植忠の砂糖屋といった大店が軒を連ね、そりゃたいしたもんやった。あの

人が苦労してこの尾張町に店を出したんやさかい、ちょっとは見劣りのせん店として盛り上げて、メトにされん<馬鹿にされない>ようにせな申し訳ないと思うとったがや。

タスキを十字に掛けモンペを履いて、することは家のことやら店のことやらどんだけでもあったさかい、時間はあっという間に過ぎたけど、何も思い残してきたことはありゃせんわ。

## 初売り風情

アセない<忙しい>いうても、師走から元旦にかけてが一等アセナかったわいね。とりわけ掃除が厳しいお姑めさんで、二言目には「商売屋はきちんとした仕事をして信用をもろうには、店先から家ん中までいつも綺麗にして置く心がけが大事なんや。そしてご先祖様と神様に手を合わせる気持を忘れたらいかん」と、聞かされとったがやさかい。

掃除するにも、「間違ってもほうきを往来へ向けて掃いてはいかん。こう、左手にちりとりを持って、ほうきを手前のちりとりの方に向けて掃くんや。そうすりゃ、お客さんにゴミを掛ける粗相も起こらんし」と、一本筋の通ったことも教えられたわ。

私ゃ、手拭いをアネさん<おかみさん>被りにして、きっと気を引き締めて、そこいらじゅう飛んで回って綺麗にしたわいね。それこそ、障子の桟に指を触れられても大丈夫な程やったわ。

店先から家中まで一段落すると、今度は初売りの準備が始まるんやわ。家の人は大年の間際はあちこち集金に走り回っとるもんで、みんな私がせなならんかったがや。蔵から紋入りの〝のれん〟や〝ちょうちん〟を出して、綺麗になっている店先に付けるんやわ。ちらっとお隣さんを見て、家のが見劣りせんかどうか見てな。

除夜の鐘が鳴り出すと、元旦やいうことで、もう一斉に初売りの店を開くんやわ。〝ちょうちん〟の灯が尾張町中にずら〜っと並ぶ姿は、どんだけ眩しゅうて、また見事なことやったやろう。懸作<かけづくり＝今の橋場町界隈>に来

る人、一九席や福助座に来る人も混ぜて、わけても賑やかしいことやった。それに、あの頃流行り出した活動写真の第2菊水劇場がすぐ横にあったもんで、物珍しさに来る人もギョウサンな<多い>ことやったわ。

オトマしい<もったいない>ことに、私ゃ毎日活動写真を見に来る人ばっか眺めとって、自分1人で入ったことは年に1回もあれば良い方やったわ。

彦三の大火事(昭和2年＝1927)で、市電の走っていた武蔵からの道がまっすぐに通うようになる前やったさかい、駅からの人は十間町や袋町を大回りして来てから、どっと溢れる勢いやったわ。確か、あの頃を境に武蔵ケ辻の十字路が出来たはずや。何せ、広い尾張町の通り一杯に、人、人.....人の切れ間のない行列で、身動きするのもままならぬ様子は、もうヤクチャモない<とんでもない・すさまじい>の一言やね。

揃いのハンテンを着た店員が勢いの良い声を掛け合うと、この店も掛け声に負けたらいかん思うて一生懸命やったわいね。自然にお客さんに頭が下がり、「ありがとうございみした」と言って笑顔になってくるんやさかい、不思議なもんや。

前田の殿様のお膝元で商売させてもろうていた商人ばっかしが集まっているんで、どのお店も構えがしっかりしておって、ほんまに粒揃いなんや。どっしりしたお店の前を、正月の綺麗な着物を着た人が行き交うのが一晩中続くがや。やっと空が白みかける頃になって、人通りが少なくなって一段落出来るがや。こんな大事な日に店を閉めるとこなんて、どこもなかったわいね。

今だ<この頃では>、初売りの日がどこもかしこも3日になってしもうて、何やら、アイソムナイ<さびしい>ばかりや。そんだけ、今から思うたら考えれんくらい、華々しい商店街やったことは忘れんといてほしいがや。

## 商家の食事

よっぽどの大店のことは知らんけど、普通の商売屋のおかみさんは、どこでも家の中では本当にアセな<忙し>かったと思うわ。勿論、家の人や店員もアセないことなかったんやない。みんなそれぞれ何やかや、することが一杯あった

んやわ。

ソヤさかい<だから>、今と違うてご飯の時間はあんまりゆっくりしとらんかったがや。箱ご膳に準備が出来ると、拍子木を打ってみんなに知らせるんやわ。店先でお客さんのお相手をしてる者以外は、バタバタと仕事のキリを付けて箱ご膳の前に正座して、主人の座るのを待つがや。

主人が席に着いて、「いただきます」と言いながら手を合わせて、初めてみんなも一斉に「いただきます」と言ってご膳に手を付けられるがやわ。たまに、主人がお客さんのお相手をしていれば、みんなそのままお預けのままや。

朝ご飯は、盆や正月、祭りといった特別の時の他は、まず"おかゆ"やったね。夜にご飯を炊いといて、次の日の朝になってからその冷ご飯にお湯を入れて手早く"おかゆ"を煮て作るがやわ。何ちゅうても、"おかゆ"やとさらさらと食べられて、そんなにご飯の時間を取られることもないさかいね。

おかずは、タクワンに梅干し。おつゆは出なんだね。"おかゆ"がおつゆの代りをしていたんで、イラナンダがいね<いらなかった>。

一汁一菜と禅寺では言うてるけど、商売屋の方がどんだけか<どれだけか>質素やったと思うわ。やっぱり、ハカ行く<能率的な>ことが商人にとっては一番先にせなならんことやったさかい。

漬物は、商家の奥を預かるおかみさんの大事な仕事やったわ。上手に漬物が出来ることがおかみさんの一番の務めやったし。それも、塩甘に漬けたのが良いとされたんや。余り塩が効きすぎると、みんながご飯のお代りを余計にするからや。勿論、醤油も甘口に近いもんを出すようにもしたし。

## ねえや(お手伝いさん)のこと

どこの商家でも、あの頃はネエヤが1人や2人は必ず居ったわいね。行儀見習いが表看板であるんやけど、貴重な働き手で、ほんまに助かったことはヨウケイ<たくさん>あったわ。

「おかみさん」「おかっつやん」と呼ばれた私らにとっては、無くてはならぬもう1人の代理人みたいなもんやったわ。子供が好きでなければ務まるもんでな

いし、それに子供達は店の手伝いでアセない<忙しい>母親に抱かれて寝るよりも、ネエヤに抱かれて寝ることが多かったようやし。
自然と情も移ったんやろね。年頃になって嫁に行くとなると、商家の方でも嫁入り支度に、相当以上の物を用意して、実家へ帰したもんや。

ネエヤが、いざ実家へ帰るとなると、それはもう涙、なみだ.....で、家中の者が揃って送り出した記憶は、経験のある人ならみんな生々しい思いとして持っているはずやわ。

そして子供好きのネエヤは、必ず元気な子供を生んで、里帰りならぬ勤め先の店へ見せに来たもんや。反対に、子供好きでないネエヤは、店に勤めていても、そこの店の子供は敏感にネエヤに馴染まなんだわ。そやさかい、嫁に行っても割合に不幸な生活をしていたようやね。

今でも、結構孫まで居る昔のネエヤが店の方へ来て、「あーやっぱり、ここが気楽や.....」と言われるのは、コソバゆい<気恥ずかしい>もんやけどね。

## 仕事を手伝って

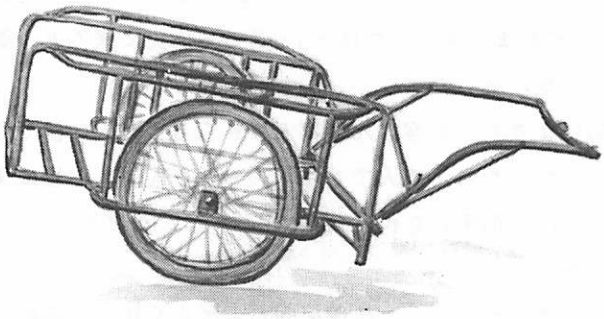
ここの店は、昔は紙の合羽いうて油紙を売っとんやわいね。今と違うて、出来合いの物を仕入れて売るだけでのうて、ちゃんと自分んとこで作っていたんや。和紙に桐油を塗ったものを乾かさないかんので、広い浅野川や時には犀川の河原へ行くしかなかったがやいね。

そやさかい、朝一番の仕事は空を見上げて、星がはっきり見えるかどうかをまず見るがや。星が空一面に光っていれば、今日は晴れるがやさかい、家の中の仕事はいったん置いて、河原の場所取りにリヤカーを引いて一生懸命走るがやわ。ウチラ<私等>と同じように、他の合羽屋や傘屋も乾かしに来るので、先に行かなならんかったさかい競走や。

河原に着くと、最初に油紙の束をポーンと一等良い場所へ放り投げるがや。それで他の者に取られんようにしてから、その場所へ降りて行き、やおら油紙を広げ出すんや。四スミに石を置いて、風で飛んで行かんようにして、ありったけの油紙を広げ終ると、やっと一段落やったわいね。ほーっとして空気を吸

うと、浅野川の川音が澄んで聞こえるせいか、汗の滲む身には何やら清々しい気持になれたわ。

夏になるとたまに、乾いた油紙を片付けに行くのに子供達も連れて行ったもんや。危ないさかい、大きな石に子供達をくくり付けておいて、その間に店員と一緒にリヤカーに軽くなった油紙を載せたわいね。一段落してから、子供達が水遊びするのを眺めるのも、また楽しいもんやったわ。



桐油を塗るのは、いつも店の中やったわいね。江戸時代から一番商店街で、前田のお殿様がお通りになっていた尾張町では、店先に臭いのするもんを出せんかったし。ほんまに、店から家の中いっぱいを使って和紙に桐油を塗ると、そりゃもうダイバラな<大変な>臭いで、初めのうちはなかなか馴染めんかったわいね。

その内にゴム引の合羽いうもんが出回るようになってから、朝早い陣取りは少なうなって来たけど、相変わらず朝早く起きることは日課やったわいね。そ

ういえば、朝の4時頃で往来には誰も居ないはずなのに、一人で歩いていると、ヒタヒタと何かがついて来る足音がするがや。どきっとなって後ろを振り返ると、カワウソが立っていたのにはびっくりさせられたこともあったわいね。
今だ<この頃では>、考えられんこったね。あの頃は、そんだけ自然と人が一緒になっておって、今ほどせせこましくなかったんやろ。

## 信仰と商売

まあ考えて見れば、私ゃ本当にソクサイ<元気>に恵まれとったんやね。お客さんの役に立つことを最初に思うと、理屈を喋べるよりも、体が先に動いたもんや。家の人なんか、イラサらん<亡くなる>ようになるまで、若い学生さんなんかが「お金があまり無いんやけど」と言って店先に来ると、儲けなんか二の次にして仕事を受けとったさかい。

一時の儲けよりも、お客さんに喜んでもらって、永い目での商いこそが大事やと思うとったんやろ。1人でも多くのお客さんに、お店に来てもろうてお世話をするごとに、前垂れを付けた姿で「ありがとうございみした」と頭が下がって来たもんや。

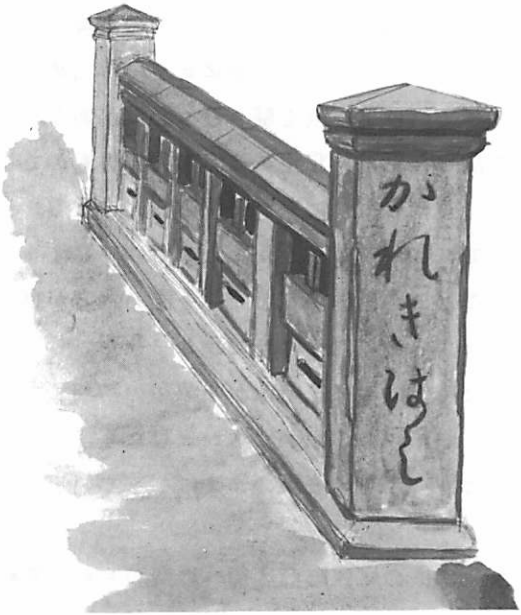
これも、毎朝欠かさずにご仏壇に向かって、お線香と蠟燭を上げて、ご先祖様と神様に手を合わせているお陰様やったんやろね。そやさかい、儲けは自分のためでなく、人様のためのものと思い、お寺さんなんかにゃ精一杯のことをして来たつもりや。

そういえば、お盆の時なんかのお墓参りは、家の墓や親戚だけでなく、お陰さんで仕事を手伝ってもらっている店員の家の墓へも、キリコや花・よねまんじゅうを供えて回ったもんや。どうかすると、1日で回れんで2日になったこともあったわいね。

店に掛かっている「手まめ、足忠実」の額も、家の人によれば"手まめ、足まめ"と読むそうで、商いの仕方を戒めているものとか。1日中動き、口も「毎度ありがとうございみした」と、始終"まめに"喋べることや。やっぱり、"お陰さんで"の気持が大事ながやいね。

上得意の七連隊の兵隊さんが、大正１４年(1925)に野村(現在の野田町)の練兵所へみんな移転してしもて、町中が大騒ぎした時も、商いの気持を忘れずに商売しとったさかい、何も心配しとらんかったわ。次の年になったら、６月にはもう兵隊さんがお城の中に戻って来たさかい。

今の人に言えることは、自分の損得を先に考えるばかりよりも、まずお客さんのためになるように動くことや。これはもう、家の人に口が酸っぱくなる程に教えられ、体ん中に沁み込んでしもうたわ。




石野寿寿美・媼(おうな＝老女で翁の対語)について

明治三十一年三月三十一日生。泉町の島田家の長女で、大正七年に石野雨具店(石野テント商会の前身)へ嫁ぐ。生来の頑張り気を生かし、夫の要吉を助けて家業の発展を導く。

## あとがき

自分の信じる道を精一杯に頑張り続けて来た人には、必ず何か学ぶべきことがあるはず。今年９１歳で、まさに盤と呼ぶに値する半生を歩んで来た石野寿寿美さんが、まだこれからも歩み続けようとする姿には、本物を感じさせられるようです。

特に商人にとっての「商い」の原点である、〝飽きない〟で一途に仕事しながら、ご先祖様と神様のご加護を素朴に感謝しつつ、お客様の役に立つことを第一義に考える。簡単そうで、続けることの難しい態度を、当り前のように行なうのを見る時、私達若手は理屈だけでない実行力の１つの基準を知らされます。

目まぐるしい情報化社会の中で、周囲の環境に振り回されて口先だけの議論をしているよりも、しっかと大地に足を踏み占めて行動する。まず、自分と店を出発点として行けば、何を騒ぎ迷う必要がありましょう。この９月に、何度かに分けて聞いた話は、以上のように得難いものでした。

ここには、連綿と続いて来た尾張町商人のたくましさと信用を支える１つの形があるのではないでしょうか。とすれば、私することなく、広く公開する機会を設けることで、皆様のご意見等を聞いた方が良いのではないか。と考え、あえてシリーズの中に加えさせて頂きました。

話を聞いた時代は、大正時代から昭和の初期までになるようです。本文中で至らない点、お気付きの点がございましたら、ご指導頂ければ幸いです。なお、聞き書きのため、当時の表現のままになっているところもあることをお断り致します。

今後とも、皆様の尾張町商店街への変わらぬご愛顧の程を願いつつ。

１９８９年１１月発行
金沢市尾張町一丁目１１番８号
尾張町商店街振興組合
理事長　　山田　勝二
尾張町若手会
会　長　　村松　淳
さし絵　　村上　隆
編集責任　石野　琇一